

枚方公済病院を受診された患者さんへ

当院では下記の臨床研究を実施しております。本研究の対象者に該当する可能性のある方で診療情報等を研究目的に利用または提供されることを希望されない場合は下記の問い合わせ先までご連絡下さい。

研究課題名（承認番号）	急性心不全患者における入院中の食事摂取量に対する実態調査及び関連する因子の検討(No.2021005)
当院の研究責任者（所属）	高林 健介(循環器内科)
他の研究機関および各施設の研究責任者	なし
本研究の目的	<p>2018年心不全患者における栄養評価・管理に関するステートメントが発表され心不全患者への栄養介入というものが重要視されてきている。その中で、少なくとも6か月間経過観察した心不全患者においては7.5%以上の体重減少が、年齢、New York Heart Association(NYHA)機能分類、左室駆出率などの心不全の予後規定因子とは独立した予後不良因子であり、体重が保たれていることが予後良好であるとの報告がAnkerらによって示され¹⁾、body mass index(BMI)が保たれているほうが予後良好であるという概念が導入された。その後、大規模研究でも同様の検討が行われ、いずれもBMI低値は予後不良であったため、欧州の心不全ガイドラインでは低体重について注意喚起がされるようになった²⁾³⁾。欧米人と日本人では体格が異なるため日本人を対象とした疫学調査で論じる必要があるが、日本人でも同様の現象が報告された⁴⁻⁷⁾。ただ、心不全増悪患者は、入院中摂食不良状態に陥るものも少なくないことを臨床現場では経験している。心不全増悪時には、体重減少、退院時のADL低下など様々な報告があり⁸⁾、入院中の食事摂取量低下も体重、ADL低下の要因であると考えられる。しかし、入院中の急性心不全患者の摂食状況について明らかにした報告はされていない。低栄養が問題となる現代の医療では、入院後早期にエネルギーを充足させ、体重減少を防いでいく必要がある。そのため、今回急性心不全患者の入院後の摂食量の実態調査及び関連因子を検証することは今後の栄養介入を行う上でも意義のあるものであると考える。さらに単施設研究では地域や病院の特色が影響する可能性がある為、多施設での検討が必要である。</p>
調査データ該当期間	2021年11月から2022年3月
研究方法（使用する試料等）	<p>●対象となる患者様 当院に急性心不全増悪にて入院された患者様</p>

	<ul style="list-style-type: none"> ●研究期間:倫理委員会承認日から2021年11月1日 ●利用する試料、診療録情報 試料:アンケート調査内容(血液検査データ、筋力評価、MNA-SF、塩分チェックシート)
試料/情報の他の研究機関への提供および提供方法	あり/暗号化した電子媒体を用いて情報の共有をおこなう
個人情報の取り扱い	情報には個人情報が含まれますが、利用する場合には、お名前、住所など、個人を直ちに判別できるような情報は削除します。また、研究成果は学会や学術雑誌で発表されますが、その際も個人を直ちに判別できるような情報は利用しません。検体や情報は、当院の研究責任者が責任をもって適切に管理いたします。
本研究の資金源(利益相反)	本研究に関連し揭示すべき利益相反関係にある企業等はありません
お問い合わせ先	上田 耕平 電話 072-858-8233
備考	